



梅島小だより

「考え抜く力」

校長 近津 勉

運動発表会は、天候にも恵まれ子ども達が、今もてる力を最大に発揮し、今できる最高の演技・競技を見せてくれました。保護者・地域の皆様におかれましては、感染症対策のもと、ご不便をおかけしましたこととお詫び申し上げますとともに、円滑な運営にご理解とご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。6月は、落ち着いて学習に取り組めるよう気持ちを切り替えてまいりたいと考えます。

現代は、テクノロジー、特にICT (Information Communication Technology) の飛躍的な向上により、あらゆるものを取り巻く環境が複雑さを増し、将来の予測が困難な状況にある時代と言われています。AI (Artificial Intelligence) の登場により、言語の理解や推論、問題解決などの知的行動さえも人間に代わってコンピューターが行うようになってきています。

こうした時代、AI が不得意とする、これまでにない課題を解決する仕事 (=過去のデータがないもしくは不十分な仕事) や、数値化できない人間の感性や経験に基づく創造的なアイデアを生み出す仕事をするうえで必要な力、つまり人間にしかできない「考える力」を高めることの重要性が増しています。

では、どうすれば「考える力」を高めていくことができるのでしょうか。多くの教育書やビジネス書に、様々な方法が語られていますが、私は次の3つに集約されると考えています。

①言葉の力を伸ばす

人が考える時、言葉を使って考えます。語彙が豊富であればあるほど、複雑な思考が可能となり、多様な考えを生み出すことができます。言葉の力 (=語彙) を伸ばすためには、本をたくさん読んだり、会話したりして言葉に触れる機会を増やすことが必要です。

②体験を増やす

人は、何か問題を解決しようとする時は、過去の経験や体験から得た知識を活用してその方策を考えます。豊かな体験は、それだけ解決のための選択肢を増やし、考えやすくなります。この場合、成功体験だけでなく、失敗した体験も有効です。「こうすると上手くいかないから、今度はこうやってみよう。」と試行錯誤することにつながります。

③自分で考える癖をつける

子どもは、何かわからないことがあったり、できないことがあったりすると、「なんで?」「教えて?」と答えを求めて質問をします。つい「それはね、…。」と教えてしまいがちです。しかし、それでは子ども達は考える機会を失ってしまいます。「なぜ?」「どうして?」と尋ねられたら、「なんでだろうね。」「不思議だね、どうしてだと思う?」と、質問や疑問を受け止めたうえで、考えるように促してみたいでしょうか。

今、学校では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでいます。基礎的、基本的な知識や理解だけでなく、それらを活用して深く深く「考え抜く力」を養っていきます。